

ベケット研究会 第52回例会 発表要旨

2018年12月15日(土)

東京工業大学

怠惰な話者の流涎症：『名づけえぬもの』の言葉とイメージの間で

Lazy Idle Speaker's Sialorrhea: Between Language and Images in *The Unnamable*

戸丸 優作

ベラックは怠惰だった。「終わり」の「わたし」はロバに乗り、「鎮静剤」の語り手兼主人公は大熊座を探す。名づけえぬものは「彼ら」の声をそのまま復唱する。怠惰はキリスト教において七つの大罪の一つとされるが、過酷な労働を強いられる労働者にとっての抵抗の身振りであったり、ある状況下で特定の主義あるいは立場と距離を取るための手段であったりするという積極的な側面も持っている。本発表ではこうした「怠惰」の両義性に着目し、『名づけえぬもの』の読解を試みる。作中に現れるイメージの操作を検討することで、怠惰がどのような回路を経由して『名づけえぬもの』というテキストを駆動するモチーフとなりうるのかを考察する。

ベケットのモダニスト教養小説—『並には勝る女たちの夢』再考

Beckett's Modernist Bildungsroman: Reconsidering *Dream of Fair to Middling Women*

杉本 文四郎

21世紀になってからベケットの小説を教養小説の伝統から読み解く試みが相次いでなされている (Sheehan、Bixby、Mooney、Stewart)。1932年頃執筆され1992年に出版されたベケットの長編小説『並には勝る女たちの夢』(以下、『夢』)は、こうした教養小説との関連において2つの主要な問題を提起している。ベケットが初めて執筆したこの小説についてはプルースト『失われた時を求めて』とジョイス『若い芸術家の肖像』の影響が指摘されているが (Pilling)、これらの先行作品は教養小説のサブジャンルとされる芸術家小説の伝統に連なっている。『夢』においてベケットは芸術家の自己形成を描くそうした伝統を屈折した形で受け継ぎながら、コスモポリタンのでありかつメディアを越境するような独自の芸術的發展を予示している。第2に、「我々は父、母、そしてゲーテを讃える」と語り手の言う『夢』では、ゲーテによる最初の教養小説『ヴィルヘルムマイスターの修業時代／遍歴時代』への僅かな言及がこれまで考えられてきた以上に重要なのではないか。ゲーテとの間テキスト性をいくつか検討することで、ゲーテ的な「教養 (*Bildung*)」の理想に対する強烈なアイロニーが見出される。そのアイロニーを通して、ベケットの芸術家としての自己形成についてより理解を深めることができるだろう。